日中戦争時期中国モダニズムの研究

鈴木　将久

A Study on Chinese Modernists during Anti-Japanese War

SUZUKI Masahisa

上海モダニストと呼ばれる文学者たちが，最も活躍したのは，1930年代前半である。その背景には，政治・経済・文化の各面において，蔣介石の南京国民政府が国家建設を遂行し，国内情勢が安定していたことがあげられる。また当時の上海は，西洋文化の窓口であり，かつ多くの中国内地の人々を受け入れていた都市であり，西洋文化と中国文化の相互接触・交流が発生していたことも忘れてはならない。上海モダニストたちは，そのような都市上海を基盤にして，それまでの中国文学の流れに異を唱え，世界文学との同時代性を意識しながら，中国語による文学表現の可能性を発掘するべく実験を続けた。

1937年日本軍が上海の租界周辺を占領し，いわゆる「孤島」上海時期が到来した。上海モダニストたちは，国内情勢の不安定化，国際的交通の阻害といった事態に直面し，新たな活動に向けての選択を迫られることになった。本研究では，戦争に直面したとき，彼らがどのような活動を行い，いかなる表現の試みを追求したのかを考察した。

本年度はとくに，詩人戴望舒と小説家穆時英を取り上げて考察した。この二人は，上海時代には極めて親しい友人として相互に影響を与えあい，また姻戚関係を結んでいた。戦争初期にはともに香港で新聞の編集に携わっている。ところが戦争が進展するにつれ，二人の方向性は大きく隔たることになった。フランス滞在経験があり，早い時期から世界的な反ファシズム思想に親しみを持っていた戴望舒は，戦争中，日本というファシズムに対抗する活動を追求した。彼は香港で『星島日報』文学欄の編集に携わりながら，戦争を，主体の形成を妨げる不透明な暴力として捉え，その暴力に対して，主体の境界を超える表現を模索することによって，抵抗しようと試みた。一方，共産党系文学者によるイデオロギー偏重の文学観に抗して，現実と表現のあいだのオルタナティブな関係を構築せんと模索しつづけていた穆時英は，戦争という残酷な現実に直面したとき，現実と表現の関係性の失調を感じ取った。彼は香港から汪精衛政権下の上海に帰還し，「漢奸」の活動を行うことで，表現の次元における失調と戦争の「法外さ」を身を以て指し示した。しかしその結末は，重慶政府のスパイに暗殺されるという悲劇であった。二人の活動から，モダニストが戦争によって被ったはかりしれない苦難と，苦難の状況下で行われた試みを読みとることができる。

次年度は，当時全国的に展開された，伝統的文学遺産の利用をめぐる論争を検討する。この論争には戦時下における「民族意識」の拡大が刻印されている。論争に対するモダニストたちの反応を読み解くことで，「伝統」への再評価と表裏一体となって現れた「民族意識」と「モダニティ」の関係について，新たな知見を得ること

を目指す。その作業はまた，中国におけるモダニズムの
質への考察につながるものと考える。